

より不運な者

ジャック・ロンドン

小泉嘉輝 訳

そして、これが彼の芸術の最後だった！すべてを悟った彼の魂はすさんでいった。生きる希望は死んだままだった。はつきりと色鮮やかに、人生という恥と苦しみが、目の前に現れた。彼は夢を見続けていた。そしていま目覚めが来なければならなかった——しかし何という目覚めだろうか！

薄暗い不潔な舞台で、ふたたび幕が上がった。そしてふたたび、彼はやせたふるえる指で譜面をめくり、機械的に序曲を弾いた。第二バイオリンはひどいものだったが、その驚異的な演奏と異常な時間に、彼は苦い笑みを浮かべた。トロンボーンは身を切るような苦悶を發し、打楽器は唐突に、まったく場違いなところで音を炸裂させ続けた。ピアノはというと、曲に調和していると言わんばかりに、演奏してはやめてを繰り返した。

演奏は彼の神経を逆撫でたが、それだけではなかった。内幕がすでに引かれていた。序曲が終

わり、彼には周囲を見渡す余裕ができた。最終場だ。けばけばしい装飾と品のないドレスに身を包んだ女が、舞台中央に進んでいた。女は切迫した金切り声を出し、持ち合わせにない音域で大衆歌を歌おうとしている。オーケストラ席は、職人や船乗り、荷揚げ人足や無法者といった——大都市のならず者たちであふれていた。給仕人たちはテーブルからテーブルへとせわしく動き回り、飲み物を出しては客を誘った。ボックス席の女たちはお高くとまった表情を投げかけていたが、その厚塗りの顔は、存在をめぐる激しい闘争への気がかりを隠すことしかできていない。会場の空気は、罵りと私語と笑い声で引き裂かれていた。歌声は幾度となくかき消され、女の顔に不安の色をもたらした。アンコールの声が小さければ、歌い手としての彼女は用済みとなる——週末を待つまでもなく、即座に。

前列では酔っ払った船乗りがひっきりなしにわめいていた。しゃがれ声の意味不明な文句は、女の甲高い歌声のよき伴奏となっていた。体格のいい給仕人ふたりが男を外へ放り出す。後方の喧嘩にはほとんど誰も目をくれない。女が歌い終わるとひとつのテーブル——座っているのは明らかに友人——から喝采が起こり、彼女は舞台を後にして苛立つ支配人に対面する。

ふたたび演奏が始まり、目を覚ました奏者は、狂気の楽団のこの夜最後の先導役になる。楽曲

は取るに足らない代物で、曲を作ったどこかの無名作曲家は、彼のように夢を見続けて目を覚ました人間なのかもしれない。それでもその曲が持つ美しさは、彼の内に秘められた感性をひそかに刺激した。演奏の不協和音は聞こえなくなり、周囲の不快な者たちは消え、奏者は思考のなかで少年時代へと立ち帰り、人生をふたたび生き直した。

彼はもう一度、山あいの家にある通い慣れた小道を歩いた。周りには兄弟姉妹がいて――家族の輪ができあがっていた。しわが多く、厳しい気候にもまれた顔の父――心優しい大人の男だ――が先住民や平原や戦争の話を、生まれ故郷の言葉を使いぶっきらぼうに語っていた。母は幼い子どもたちに囲まれていた。母親らしく気を配りながら、その日の小さな出来事について聞き、楽しい話には一緒に楽しみ、悲しい話には一緒に悲しんだ。しかし彼は、母の隠れた苦労を物語る、目と口まわりにくつきりと引かれたしわを暗い気持ちでながめていた。まったく！ 遠い日の奏者はその意味を知らずにいたのだ。彼は忘れられてもいなかった。不安の色がないとは言えないが、母は誇らしげな目を何度も彼に向けてくれていた。彼はシグナ^ニがかつてしていたように、キッチンテーブルに椅子を寄せ曲を書いていた。

突如として場面が変わった。彼は村の小さな教会に忍び込んでいた。そばでは優しい未婚婦人

である牧師の娘が立ち、オルガンの練習をしている。彼は喜びのあまりえも言われぬ気持ちとなり、小さな心はずませながら、その場をそっと抜け出し、川を探した。向こうにある、雪傘がかかった山からさわがしく流れてくる小川だ。そこで彼は水の歌に耳を傾け、松の木々にそよぐ風の音を聞いた。生きとし生けるすべてが奏でる音楽を耳に響かせながら家路を歩き、飾り気ない家に着いたときには心が躍っていた。そしてふたたび、大好きなシグナの本を読みふけり、濡れた目を上げた。野心が名声へ向け、力強くその一步を踏み出した。明るいタッチで描かれた未来が、成功という鮮やかな遠景のなかに現れた。幼い想像力にはすべてが現実的に見えた。落ち着きなくベッドで転げまわり、彼は立ち上がった。そして夜の静寂のなか、堂々たる山々の陰に立ち、抑制された自然の夜想曲を聴き、内に眠る才能が熱く脈打つのを感じた。途方のない願望が全身を覆った。

その才能はどうなってしまったのか？ 今となつては才能とは言えないだろう。どこでどのようになつてしまったのか？ 彼にはどうしてもわからなかった。

あるとき、父が空き時間を使って柳のフルートを作ってくれた。このフルートと彼は、なんと親愛なる相棒となつたことか！ 休日、彼が少年らしい遊びから逃げ出し、森の暗い迷路で一人に

なってしまったとき、相棒たちはなんと鋭い音のハーモニーを奏でたことか！ そのうち、牧師の娘が手ほどきをしてくれるようになり、彼は村の教会で演奏を始める。

まったく、幸せな時間だった！ 日中ずっと畑や森で仕事をしていた彼は、夜を待ちわびた。仕事が終わると教会へと走り、自分と暗闇を相手に演奏をした。即興の演奏で美しい音楽を作る彼を、村人たちは一様にもてはやした。そしてある日、村を訪れた旅人に、才能はあるがここでは芽が出ないだろうと言われたのだった。「街へ出ることだ」と旅人は言った。

街だ！ 街だ！ 四六時中、いかにこの言葉が耳に響き、彼につきまとったことか！ 街！ 街！ そうだ、街に行かねばならない。そこで師を見つけ、欲求を満たすことができる。そこで富と名声が待っている。

「音楽だ！ 音楽だ！」彼の魂がこう叫ぶと、「街だ！ 街だ！」とこだました。

だが街ははるか遠くにあった。時が経っても彼は働き続け、少しずつ貯金を増やしていった。期待を胸に計画を立てながら、文句ひとつ言わず仕事をした。しかし欲望に強く襲われたときには、鋤の扱いが目に見えて下手になった。鋭く光る鋤の刃が目の前でゆらゆらと踊ることも多かった。ヒバリの歌でさえ、彼の耳にはつまらなく聞こえた。

未婚の娘たちが恥ずかしそうに視線を送ってきても、結婚という考えなどなかった——結婚は音楽との別れを意味していた。彼は独身を貫いた。村人たちは彼に慣れるまで不思議に思っていた。そして娘たちは他の、より幸運な男たちと結ばれた。

ついに運命の日が訪れた。彼は山の家に別れを告げ、希望に胸をふくらませ街へ向かった。だが成功の扉は彼のノックに応えてはくれなかった。彼は名もなき放浪者であり、気づけば、才能や天才や力のない者のリストに名前が載っていた。

彼は食い下がった。師を見つけ——最良の師を持つ余裕はなかったが——勉強に打ち込んだ。手中に収めようとする世界について多くを学び、名声へと架けられたはしが巨大な構造を持つことを知った。まさにその影が畏怖の念を起こし、その下部では足場を求めてもがく多くの人間がぶつかり合っていた。彼の純真素朴な魂は、その壮観に圧倒された。そして目の前にある課題の大きさに驚いた。それでもめげることなく、その達成に身を捧げた。つっぱねられることなど当たり前、苦悶や心痛を幾度となく味わった。多くの人間が、金やコネ、時には正当な評価を得て先を行っても、彼はあきらめなかった。

それでも未来は輝いていた。彼は秘めた才能が早く注目を浴びる外の世界へと、もがき進んだ。

何度かは人前でバイオリンを弾くことができたし、ミュージカルや芝居でささやかながら需要があった。大御所たちに賞賛されることもあった。

だが資金が減るにつれ、彼は節約のためと食事の回数を減らした。そのうち音楽に献身するあまり、不注意になり冬の寒さに十分に備えなくなった。ある日彼は寝たきりになった。長く体調を崩し金は底をつき、健全とは言いがたい状態で路上暮らしが始まった。彼には誇りがあり、金のある友人に援助を求めることなどできなかった。

次また次そのまた次と、何度も場面が切り替わった！不気味な悪夢、怖ろしい寒さの幻影、欠乏と病氣。そのすべてが悲惨なことよ！身を蝕むような、長く冷たい街路での放浪——あたたかな眼差しも、やさしい挨拶もない——服はぼろぼろにすり切れ、なおも熱くたぎる才能に苦しみ、失われた音楽へのすさまじい想いにあふれていた。だがもつと辛かったのは、死にゆく我が子を乳の出ない胸に抱く献身的な母親のように、自らの芸術が体内で冷たくなっていくのを感じたことだ。芸術の死はそのときだったのか？最後に身を任せた気だるさを思い出しながら彼は思った。

辛く苦しい時間を過ごしたあと、芸術はついに輝いた。ある夜、明るい光に引き寄せられ行っ

た音楽ホールの外で凍えていると、館員が近づいてきた。第二バイオリンが急に体調を崩してね、空きができたんだ。代わりに弾いてくれないだろうか？ なんと！ 難民への安息地のような申し出だった！ どれほど喜んで引き受けたことか！ ふるえる指で触れたときの、バイオリンの振動をまた感じたときの喜びときたら！ 彼の芸術はこのとき生き返ったのか？ いや、違う。芸術ではない。あの薄暗く照らされた穴で夜ごと、その後何年も続けた演奏は、魂ではなく作業だった。

幸せとは言えない歳月が過ぎた。はじめは、昔の想いがこみ上げることがよくあった。彼はそのたびに「いつか」と答えた。しかしそのいつかが訪れることはなかった。いつも目の前で躍っていた想いは次第に薄れ、理想は路傍で立ち遅れ、ついに夢は視界から消えた。今宵、彼は目を覚ました。すべてを悟った。彼は老いたのだ。希望は去った。哀しみと後悔が心の中で声を上げた。

第二バイオリンが楽譜の最後を弾き終え演奏をやめた。第一バイオリンはなおも弾き続けた。打楽器奏者が目を覚まし、痙攣したように間をあけて叩いた。ピアノがいくつか和音をはさんで数小節を走り抜けたが、絶望して手を置いた。だが第一バイオリンは演奏を続けた。奏者の目は閉じられていた。バイオリンが彼の苦悶に声を与えていた。

場内のざわめきは止み、すべてを沈黙が覆った。支配人は驚いた様子だった。給仕人は仕事の手を止めた。女たちは前のめりになった。持ち上げられたグラスは口を付けられず、パイプと煙草の火は消えてしまった。

悲しい、ふるえる音色が、嘆き、むせび、すすり泣いていた——慄くような、長く尾を引く張りつめた苦悶が、惜しみ、叫び、悲しんでいた。しくしくと泣き哀しみ、悼みながら、奏者は演奏を続けた。場内は、氷のような死に息を吹きかけられたかのように静まり返っていた。

苦悶と悲痛の涙が、悔恨と後悔のため息が、痛みと絶望の叫びが、揺れる空気を振動させていた。筆舌に尽くしがたい感覚の世界。枯れた希望と萎びた喜びに満ちた悲惨のすべて。消えゆく才能の嘆き。バイオリンと奏者はひとつ。無駄となった人生の悲嘆と苦悩が、苦悶のなかで泣き叫ぶ。

曲は不気味で怖ろしくなった。——身の毛がよだつ慄くような緊迫——鋭い音色に甲高い音に耳をつんざく叫び。ふるえ、わななき、おびえ、揺れながら、バイオリンは恐怖と失望の中で叫び声を上げた。うめきと嘆きと悲鳴——感情の渦——は、恐怖と驚異に満ちていた。

弦のひとつが切れ、不快な不協和音とともに音楽が止まった。感覚を失った手からバイオリン

がすべり落ちた。ひとりの女が悲鳴を上げボックス席で卒倒した。ほかの客たちは叫んだ。それを除けば、すべては静まり返っていた——拍手喝采より多くを語る理解がそこにあった。

奏者は覚束ない足どりで舞台を去った。

「もういい年だから、すこしイカれちまったのさ」給仕人たちが言った。

夜明け前の港湾施設。薄暗がりに包まれた人影がひとつ、よどむ海を臨みつぶやく。

「海は静かで深く

その胸ですべてが眠る

ただ一步ですべてが終わる

飛び込めば泡がたち何もなくなる^三」

「飛び込めば泡がたち何もなくなる」

Jack London "One More Unfortunate" (1895)

ⁱ "One More Unfortunate" という作品名は、イギリスの詩人 Thomas Hood (1799-1845) が晩年に書いた "The Bridge of Sighs" (1844) の第一行目に由来すると考えられる。この詩に登場する身寄りのない女性は、本作のバイオリン奏者同様、川に身を投げて自殺をする。

ⁱⁱ ロンドンの幼少時からの愛読書 *Signa* (1875) の主人公。 *Signa* はイギリスの児童小説家 Ouida (Maria Louise Maria Louise Ramé, 1839-1908) による作品。イタリアの孤児シグナが一流のバイオリン奏者になるまでが描かれている。ロンドンは書簡の中で、この物語によって芸術の道へと導かれたと言及している。

ⁱⁱⁱ Henry Wadsworth Longfellow (1807-1882) の演劇詩 *Christus: A Mystery* の第二部 "The Golden Legend" からの引用。この詩をロンドンが、この作品以外にも "Devil's Dice Box" (1898 年執筆、未発表) と *Martin Eden* (1909) にも引用している。

訳者あとがき

本作 "One More Unfortunate" は、ジャック・ロンドン (1876-1916) が高校生のときに書いたものである。こう聞くと、少し驚かれるかもしれない。なんというか、全然高校生らしくない。普通の高校生と言えば、将来に多少なりとも希望を抱いているものだ。ところがこの作品はどうだろう。バイオリニストの希望は否定されるばかりで、物語全体を通して、人生を悲観するような暗いトーンが底流している。たしかにロンドンは、アメリカ文学史的に自然主義に位置する作家である。つまり、彼が意識的にせよ無意識的にせよ、時代が要請するものとして、遺伝や環境に運命づけられた人間を描いたという解釈は十分にできる。しかし僕個人としては、作品の「高校生らしくなさ」の背景は、もっとシンプルなところにあると思っている。

端的に言うと、ジャック・ロンドンは普通の高校生ではなかった。それはもちろん思想的にもあるが、元をたどれば経験的に普通でなかった。ロンドンが高校に入学したのは、彼が十九歳になる年だった。それ以前に彼は、学校外でさまざまな経験を積んでいた。幼少時からヒステリックな母親に振り回され、実の父親には会ったことがないばかりか連絡しても息子だと認められ

ず、養父は体調を崩しがちで仕事を転々とし、一家の家計は安定せず転居を繰り返した。貧しい家庭がゆえに、ロンドン少年は早くから缶詰工場など劣悪な環境下で長時間労働をし、低賃金に耐えられず牡蠣泥棒へと転身、かと思いきや今度は泥棒を捕まえる警備側へと鞍替え。船上での仕事はより大きなものとなり、はるかベーリング海まで出て八か月におよぶアザラシ猟を経験、その途中でハワイと日本を訪れて異国を知り、帰国後はふたたび肉体労働に戻り、労働環境への怒りからアメリカを横断する反政府運動家の一行に加わるも途中で離脱、そのままあてもなく放浪生活が続いていると浮浪罪で逮捕、一か月の留置所生活を経てようやく故郷へ…。と、こんなふうに、とにかく普通でない経験をしたのち、ロンドン少年は高校生になった。

そんなロンドンが「高校生らしい作品」を書けなかったのも無理はない。彼はすでに多くのことを学び過ぎていた。もちろん、楽しいこともたくさんあっただろう。しかしそれ以上に、人間や社会の暗い部分の数々を目の当たりにしたはずだ。本作には、そのような作者の一次的な体験から得た考えのうち、ネガティブな側面が表れているのではないだろうか。

ロンドンにとって、高校生活というものが刺激のない退屈な日々だったことは想像に難くない。事実、自らの体験を作品の素材としたロndonは、高校という現場を物語の道具として用いるこ

とはほとんどなかった。そういう意味で、高校生活は彼の文学修養の役に立たなかったと言ってもいいだろう。しかし、発表の場を提供してくれたという点において、高校生活はロンドンに大きな恩恵をもたらしてくれた。

本作 "One More Unfortunate" は、オークランド高校の学内新聞 *The High School Aegis* に投稿され活字となったものである。それ以前にロンドンでは、アザラシ猟での体験を元にした物語 "Story of a Typhoon Off the Coast of Japan" (1893) が *San Francisco Morning Call* に掲載され、臨時収入を得たことがあった。一方で、イージス紙はいち高校の出版物あり、そこから収入を得たわけではないし、また多くの読者を得たわけでもない。しかし、全六作という複数の短篇を発表することができたという体験は、ロンドンにとって大きな財産となったはずだ。六度の「書き、投稿し、掲載される」という成功体験がなければ、その後挫折続きのロンドンは、職業作家になるまでの苦難を乗り越えることができなかったかもしれない。

イージス紙に掲載されたのは、自身をモデルにした労働者階級の少年の冒険譚的な物語や、アザラシ猟の際に立ち寄った日本での体験を元にした随筆、そして恐怖や悲観が漂う本作といったように、その後多彩な作品を生み出すことになるロンドンの原型のような作品群である。高校卒

業後、いくらかの紆余曲折を経てアラスカ方面へと赴き、さらなる普通でない体験を積み作家となつていくロンドンの原風景のひとつとして、拙訳をお楽しみいただければ幸いである。

今回拙訳が掲載に至ったのは、原稿を丁寧にお読みいただき的確な助言をくださった水野尚之先生と、今号の編集長として尽力してくれた牧野広樹くんのおかげです。お二人に心から感謝をしたいと思います。お世話になりました。

また、しばらくの学術的ブランクを経たのち、翻訳という形で僕がふたたび学問と向き合うことができたのは、水野先生の献身的なサポートと、藤本雅樹先生のあたたかな励ましがあったからです。師に恵まれたと改めて感じ入りました。ありがとうございます。

最後になりましたが、文字通りの拙訳、かつ決して明るいとは言えない内容の作品でたいへん恐縮ですが、本翻訳をお二人の先生に捧げたいと思います。本年お亡くなりなられた辻井栄滋先生と松岡信哉先生へ。先生方には、学問はもちろんのこと、人として大切なことをたくさん学ばせていただきました。何も恩返しができなかったことが本当に本当に悔やまれます。お二人のよいうな親切・誠実・勤勉な人間に少しでも近づけるよう、これからの日々を送っていききたいと思っています。どうか見守っていてください。

参考文献

Labor, Earle. *Jack London: An American Life*. Farrar, Straus and Giroux, 2014.

London, Jack. *The Complete Poetry of Jack London*. 2nd ed., edited by Daniel J. Wichlan, Little Red Tree Publishing, 2014.

---. "One More Unfortunate", *The Complete Short Stories of Jack London*. edited by Earle Labor, Robert C. Leitz, III, and I. Milo Shepard, Stanford UP, 1993, pp. 30-34.

Walker, Dale L. *The Fiction of Jack London: A Chorological Bibliography*. Texas Western P, 1972.